唐代砕葉鎮史新探

柿　沼　陽　平※

※帝京大学文学部史学科

はじめに
Ⅰ．唐代砕葉鎮史略
Ⅱ．唐朝進出前の砕葉
Ⅲ．唐代砕葉鎮の築城と破却
Ⅳ．碑文よりみた唐代砕葉鎮
おわりに

はじめに

唐代の砕葉鎮は、唐帝国の最西端に位置する。伝世文献によれば、当地をめぐって唐・突厥・突騎施・吐蕃等の強国がはげしい取り合いを演じた。すぐ西側にはタラス河が流れており、唐とイスラム勢力が衝突したことで有名である。タラス河畔の戦い（以下、タラス戦）によって唐の西進は止まり、中国本土の漢人勢力（漢文行政文書を操る皇帝と官吏が民を直接統治する勢力）が砕葉以西に及ぶことはなくなる。唐代以前にも砕葉以西に漢人勢力の直接統治が及んだ形跡はなく、その意味で砕葉鎮は、史上最西端に位置する漢人都市であったといえよう[1)]。よって、唐代砕葉鎮は、たんに無数にある帝政中国期の遺跡のひとつではなく、むしろ唐代の対外交渉史を理解し、当時の中央アジア史のありようを知り、中華文明拡大史の限界を知るうえで、非常に重要な都市なのである。

もっとも、唐代砕葉鎮史に関しては従来論争が絶えない。尚永亮氏の総括によると、最初に問題となったのは、砕葉鎮が実際どこにあったのか（換言すれば、唐代砕葉鎮遺跡はどこか）、伝世文献で唐代砕葉鎮とよばれる場所は１箇所に絞りうるのか、砕葉鎮と安西四鎮との関係はいかなるものかである[2)]。これらの問題は、砕葉関連の文字史料がどれも断片的で、全体像の把握が容易でなかったために生じる。ただしその後、多言語を駆使した歴史学的研究により、唐代に「砕葉」とよばれた鎮は１箇所しかない点が判明した。また、現キルギス共和国内のトクマク周辺には複数の古城の存在が知られ、20世紀後半の考古調査を通じて、そのなかのアク・ベシム遺跡こそが唐代砕葉城であると推定されるに至った[3)]。後述するように、この点は2017年度の正規の考古発掘で、漢文史料の出土があったことにより、歴史学的

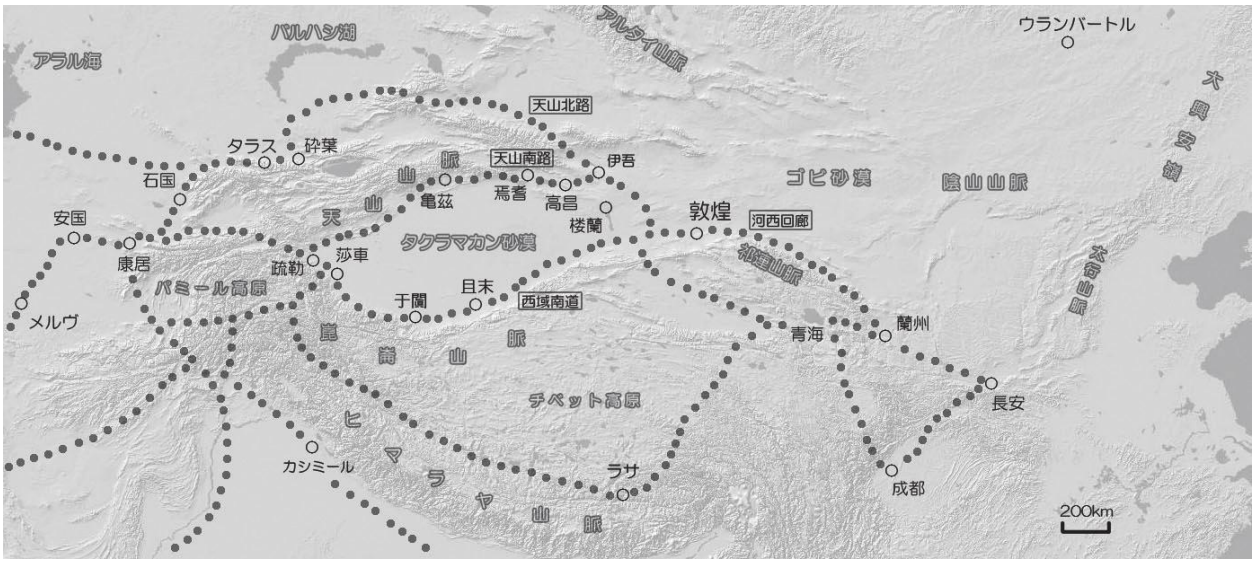

図１．中央アジアとシルクロード・ネットワーク

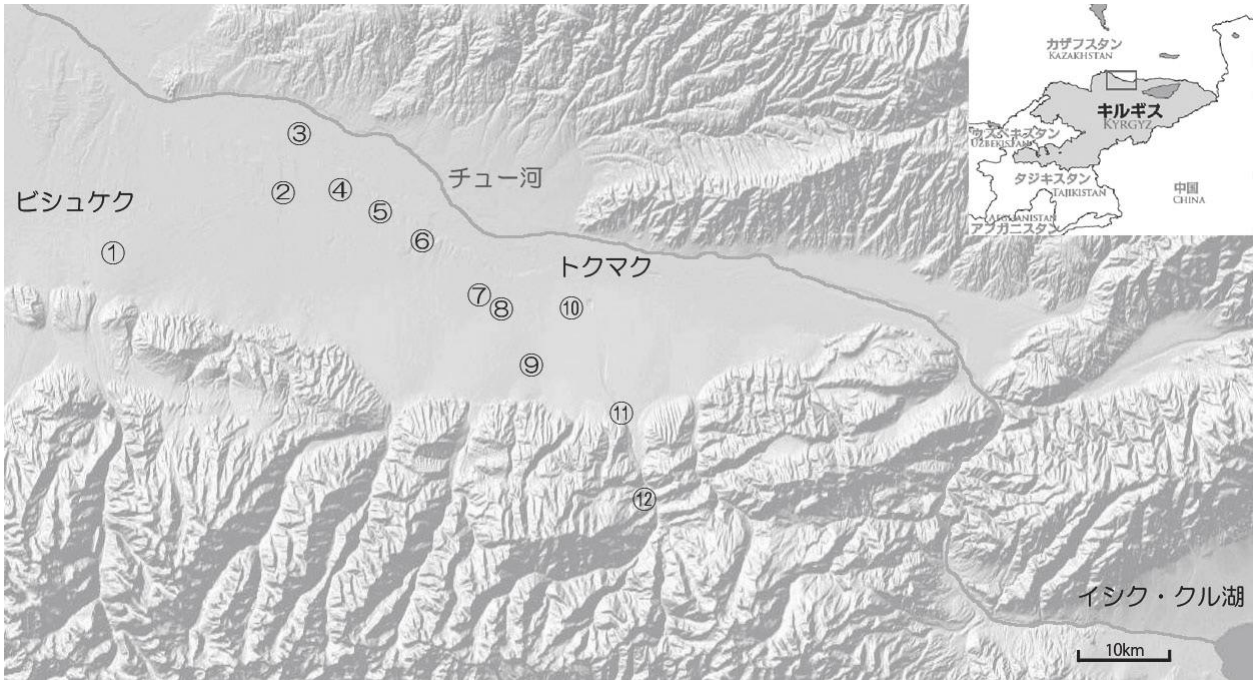

図 2. アク・ベシム遺跡等の所在
①ノヴァ・パクロフカ遺跡　②クラスナヤ・レーチカ遺跡　③ケネシュ遺跡　④セレホズクヒミヤ遺跡
⑤イワノフカ遺跡　⑥ケンブルン遺跡　⑦小アク・ベシム遺跡　⑧アク・ベシム遺跡
⑨スタラヤ・パクロフカ遺跡　⑩ブラナ遺跡　⑪シャムシー第４遺跡　⑫シャムシー第３遺跡

にも鉄証を得た。[4)]

それでは、砕葉鎮の問題はこれですべて解決かというと、そうではない。むしろ砕葉鎮史研究は、現在まったく新しい問題群に直面しつつある。すなわち、唐代砕葉鎮＝アク・ベシム遺跡とすれば、今後はアク・ベシム遺跡を考古学的にさらに調査し、出土遺物を整理し、それらを歴史学的知見のなかに位置づける必要がある。また、そもそも近年の研究者が唐代砕葉鎮＝アク・ベシム遺跡とする史料的根拠は何であり、それは本当に論拠たりうるのか。ほかにこの点を裏付ける根拠はないか。アク・ベシム遺跡自体はじつは東西２城よりなるが、両者の関係はいかなるものか。アク・ベシム遺跡周辺にはほかにもいくつかの遺跡があるが、これらの相互関係はどのようなものか。私たちは今や、こういった点にも検討を加えねばならないのである。

ところで帝京大学では2016年度以来、山内和也氏を団長とし、キルギス科学アカデミーと共同で考古調査隊を組織し、アク･ベシム遺跡を発掘している。筆者もその一員として、2016年11月と2017年５月に発掘に従事するとともに、関連史料の収集・解読を進めた。本稿はその中間報告であり、唐代砕葉鎮の重要性を念頭におきつつ、歴史学の立場から上記問題群への接近を試みるものである。具体的には、まず唐代砕葉鎮をふくむ安西四鎮に関する伝世文献と、それをふまえた近年の先行研究をふまえ、唐代砕葉鎮をめぐる歴史を概観する。つぎに唐朝進出以前の砕葉鎮のありようを文献に基づいて説明する。さらに、唐朝進出後の砕葉鎮に注目し、それが廃棄されるまでの過程を明らかにする。そのうえで、当該遺跡の考古調査の一端を紹介し、それと歴史学的知見との相互検証過程を通じ､アク･ベシム遺跡（とくにそのなかの第２シャフリスタンを中心とする）こそが唐代砕葉鎮であるとの説を検証する。そして最後に、筆者の実見に基づく出土文字資料（杜懐宝碑とクラスナヤ・レーチカ碑）の新釈文を提示し、唐代砕葉鎮遺跡の存在を裏付けるとともに、唐代砕葉鎮が周辺の聚落や寺院をも包括する複合体をなしていた可能性を指摘する。

Ⅰ．唐代砕葉鎮史略

そもそも唐代砕葉鎮をめぐって諸国がしのぎを削った理由は、少なくとも第１に、砕葉鎮がいわゆるシルクロード交易上、かかせぬ位置に存在したためである。第２に、砕葉付近には農耕に適した大地

が広がり、水量も豊富で、牧畜も可能で、ゆえに農耕民と遊牧民の双方にとって垂涎の的であったためである。以上２点をふまえ、唐代砕葉鎮とその歴史的背景をおおまかに年表化してみたい。

ちなみに、砕葉をふくむ唐代安西都護府関連の漢文史料は、すでに収集・整理されている[5]。また多言語を駆使した砕葉鎮史研究として、内藤みどり氏や齊藤茂雄氏の専論があり、関連諸論文を網羅的に検証している[6]。加えて、タラス戦（751年７月）前後に関しては、アラビア語文献を駆使した前嶋信次氏の研究もある[7]。以下の年表は、それらの成果を取捨選択し、簡略にまとめなおしたものである。その基準として、まずは史料的裏付けがあり、異論の少ない点を挙げた。また異論のある箇所は両論を併記した。さらに砕葉鎮の動向に関連する歴史的大事件にも適宜言及し、若干の私見も加味した。もっとも、現在歴史学者の間では、すでにもっと微に入り細を穿つ議論が展開されている。だが、文献の専門家以外には理解しにくいところもあるようで、筆者は発掘現場にゆくたび、簡要な年表を求められた。そこで、そうした考古学者の要望に応えるためにも、本年表を作成した次第である。

本年表は、砕葉が唐・突厥・突騎施・吐蕃等の争覇の地であったことをしめす。それによると、砕葉鎮の保有者は100年足らずのあいだに転々としている。砕葉鎮を唐人が直接統治した期間はじつは長くなく、確実なのは679～686年と692～703年の合計25年間である。論者のなかには、648～651年、658～660年にも砕葉城に唐の行政単位が置かれ、660年～667年（もしくは670年）にもその置廃があったとする者もいるが、この点はなお論争がある。かりに唐の行政単位が置かれたとしても、当時実質的に当地を支配していたのは西突厥とその遺衆であり、その支配も不安定極まる。以上をふまえ、つぎに唐代砕葉鎮成立（679年）以前の砕葉城の様子からみていこう。

Ⅱ．唐朝進出前の砕葉

本稿冒頭で紹介したごとく、キルギス共和国内にあるアク・ベシム遺跡こそは現在一般に、唐代砕葉鎮の遺構を含むものとみなされている。本稿第３節で後述するように、この点はもはや疑いえない。しかし、これによってすべての疑問点が氷解したわけでもない。アク・ベシム遺跡は広大で、さまざまな時代の遺構を含むため、一体どこが唐朝進出以前の砕葉城で、どこが唐代砕葉鎮遺跡で、どこがそれ以後の遺跡かは、今後別途検討していかねばならないのである。

この点を考えるうえで、従来注目されてきたのは、アク・ベシム遺跡が左・右の城よりなる点である。本稿では、左側を第１シャフリスタン、右側を第２シャフリスタンとよぶ[8]。築城開始時期は第１シャフリスタンのほうが古く、ラスポポヴァ氏は、５～６世紀にソグド人植民都市として建設されはじめたものとしている[9]。張広達氏によれば、ソグド人はタラス河・チュー河に沿って東進した[10]。実際に、2017年５月の発掘でも、第１シャフリスタン中央部からソグド文字の墨書された土器が出土しており[11]、第１シャフリスタンにソグド人がいたことを裏付ける。どうやら唐朝進出前の砕葉城を理解するには、まず第１シャフリスタンの歴史を理解する必要がありそうである[12]。

第１シャフリスタンとソグド人について山内和也氏は、当地の自然環境をふまえつつ、こう推測している。第１シャフリスタンにはまず「遊牧民が支配する地域に定住民であるソグド人が進出し」た。だが、「定住民と遊牧民は隣接して暮らしていたものの生活圏は異なって」おり、「遊牧民は山麓から山間部で移牧［transfumance］を行い、そして定住民はチュー川南岸の河岸段丘上に都市を建設し、灌漑システムを構築することによって農耕を営んでいた」と[13]。そのうえで山内氏は現在、第１シャフリスタンの考古発掘をすすめている。

それでは、唐朝進出以前の砕葉城（第１シャフリスタン）の状況について、歴史学的にはどのような手がかりが得られるであろうか。ここでまず注目されるのは、周知の基礎史料ともいうべき、つぎの２史料である。

①清池（イシク・クル）の西北に500里あまりで素葉水城に到着する。城の周囲は６、７里（約2.5～3㎞）で、諸国の商胡が雑居している。土地は稷［キビ］・麦［ムギ］・蒲萄［ブドウ］に適する。木々は少ない。気候は風が冷たく寒いので、人びとは氈（細毛の織物）や褐（粗い毛織物）を着ている。素葉以西には数十の孤城があり、みな各々の君長を立てている。命令を受けているわけではないが、みな突厥（西突厥）に隷属している。素

表１．砕葉鎮関連年表

支配	西暦	大事記
突厥	626	玄武門の変で太宗李世民即位。
	628 ～ 630	東突厥（第一可汗国）が唐に降る。薛延陀の夷男が唐の支持を受け、モンゴル高原支配。ササン朝ペルシアがシリアでイスラム勢力に大敗。このころ玄奘が砕葉城（私見ではシャフリスタン地区）を訪問し（628 年説、629 年説、630 年説あり）、西突厥の「葉護可汗」（統葉護可汗説と肆葉護可汗説あり）と面会[14]。
	634 ～ 635	唐が吐谷渾を討伐して鄯善・且末へ侵攻。630 年代に西突厥は内部分裂。
	639	唐が高昌に進攻。イスラム攻勢に悩むササン朝ヤズデギルド 3 世の使者が長安訪問。
	640	唐が高昌を州郡に編入し西州とする。安西都護府を設置（治所は交河城、のち移転）。毎年 1000 余名の現地人が徴兵され常駐（貞観政要 9）。
	642	ニハーヴァンドの戦いでイスラムがササン朝を滅ぼす。ヤズデギルド 3 世逃亡。
	644	唐が焉耆に侵攻（647 年に再度侵攻）。
突厥？	648	唐が亀茲を攻略し安西都護府設置。「安西四鎮」成立。ただし亀茲・疏勒・于闐以外に、焉耆か砕葉かで説が分かれる[15]。
	649	太宗李世民死す。高宗李治即位。吐蕃のソンツェン＝ガンポ死す[16]。
	651	西突厥の阿史那賀魯が唐に反旗を翻し砕葉城を占拠し、沙鉢羅可汗を称す（648 年砕葉鎮設置説支持者は 651 年に砕葉鎮が西突厥に奪われたとする[17]）。ササン朝ヤズデギルド 3 世が逃亡先のメルヴで殺される。のち子卑路斯（ペーローズ）がトカラで帝位継承。トカラは仏教国ゆえイスラム勢力に抵抗。
	655	唐で武照が皇后となる。
	657	唐は西突厥の阿史那賀魯を大破し、西突厥 10 支族を西の 5 弩失畢部と東の 5 咄陸部に分け、西を阿史那歩真（継往絶可汗・濛池都護）、東を阿史那弥射（興昔亡可汗・崑陵都護）に委ねる。東に 6 都督府が置かれ、西にも都督府が置かれた[18]。阿史那氏の衰退はじまる。
	658	濛池都護阿史那歩真のもと、砕葉に州が置かれたとの説あり[19]。
	659	阿悉結闕俟斤の都曼が叛乱し、西（阿史那歩真麾下）の都督や州は廃止。吐蕃が実力者ガル氏の主導で吐谷渾へ侵攻（～ 663 年）[20]。
	660	唐で二聖政治開始。百済滅亡。都曼の叛乱が鎮圧される。660 ～ 661 年に西（濛池都護阿史那歩真）で安西都護府所属の都督・州が復活し、砕葉都督府（5 州統治か）復活か[21]。
	661	イスラム躍進に悩むトカラ等は唐へ救援要請。唐は王名遠を派遣し、名目上、トカラ方面に波斯都督府を含む諸都督府を設置。
	662 ～ 667	阿史那歩真が唐将蘇海政と阿史那弥射を謀殺。のち阿史那歩真も殺され、西突厥は混乱。660 ～ 667 年（もしくは 670 年）、砕葉鎮も放棄されたとの説あり[22]。663 年に白村江の戦い。663 年に吐蕃の攻撃で吐谷渾の可汗が逃亡（所謂吐谷渾滅亡）。吐蕃は別途、吐谷渾王を擁立・支配[23]。665 年に吐蕃がパミールを越えて西から弓月・疏勒とともに于闐へ侵入[24]。
	668	高句麗平定。
	670	吐蕃がパミール側から疏勒経由で亀茲等を制圧（のち撤退）[25]。670 年以前に疏勒・于闐は吐蕃側で、670 年に亀茲・焉耆も廃止され[26]、安西都護府は西州へ撤退。この時（もしくは 660 ～ 667 年）、砕葉鎮も放棄されたとの説あり[27]。670 年、所謂吐谷渾滅亡に際して唐が出兵するも、吐蕃が勝利し対吐谷渾支配を確立[28]。
	674	唐で皇帝を天皇、皇后を天后と改称。
	676	このころ唐は吐蕃より安西四鎮の地を奪還。
	677	阿史那都支（十姓可汗）が李遮匐と反乱し（砕葉を拠点とした可能性あり）、阿史那歩真死後の西突厥を糾合し、吐蕃と連合し安西四鎮を陥す。
唐	679	唐は、長安に亡命中のササン朝末裔ペーローズの子泥涅師（ナルセス）を西方で復権させる名目で、安撫大食使裴行儉が西方へ進軍。阿史那都支が裴行儉一行への警戒を解いたため、裴行儉は阿史那都支を急襲して砕葉城接収。9 月頃、唐の王方翼が新たに砕葉に築城（私見では第 2 シャフリスタン）。だが王方翼は庭州刺史に異動し、杜懐宝が「安西を統べ、砕葉に鎮守す」[29]。だが杜懐宝は安西副都護ゆえ（杜懐宝碑）、このとき安西都護府が砕葉に置かれたかは疑問[30]。
	682	阿史那氏の骨咄禄（クトゥルグ）が陰山山脈付近で東突厥を再興し、イルテリシュ可汗を自称（突厥第二可汗国）。熱海付近で阿史那車簿が反乱。裴行儉の急死で、王方翼が出陣・撃破。唐は高宗末の混乱期ゆえ西突厥指導者をすぐには新たに擁立できず。

支配	西暦	大事記
唐	685～686	阿史那弥射の子の元慶を玉鈐衛将軍兼崑陵都護・興昔亡可汗とし、686 年に阿史那歩真の子の斛瑟羅を継往絶可汗・濛池都護とする（だが 690 ～ 703 年に斛瑟羅は唐へ亡命。東突厥の攻勢によるとする史料や、西突厥咄陸部内の突騎施烏質勒の台頭・反抗によるとする史料あり）[31]。
吐蕃	686～687	唐で高宗李治死去。中宗即位。武后が摂政。阿史那元慶は咄陸部安輯に失敗し、さらに 686 年か 687 年に吐蕃が砕葉を陥す（686 年説は吐魯番文書 68TAM100:1-3 に依拠）。吐蕃はラサから西北への進軍路を採用したとおぼしい[32]。
	690	9 月、武后が即位（国号は周）。『大雲経』を編纂し、大雲経寺に配置。
	691	東突厥でイルテリシュ可汗死去。黙綴可汗（カプガン）即位。唐に攻勢。
唐	692～693[33]	唐の王孝傑らが突騎施と結び吐蕃に大勝し、砕葉鎮復活[34]。安西都護府（亀茲）に漢兵 3 万を常駐させる体制へ転換。第 2 代目興昔亡可汗・崑陵都護阿史那元慶が刑死。
	694	大食が砕葉で唐へ獅子献上を図る。吐蕃は統葉護可汗（元慶の子の俟子）を擁立し、旧西突厥勢力を糾合し砕葉を攻めるが、砕葉鎮守使韓思忠が迎撃し、千泉で撃破。
	698	吐蕃で、内政のみならず対外軍事をも担っていたガル氏が粛正され、吐谷渾支配等が不安定化[35]。
	700	唐は阿史那斛瑟羅（阿史那歩真の子）を平西軍大総管として砕葉へ派遣。吐蕃は旧西突厥系反唐勢力か東突厥と結び、草原世界への進出を継続。
突騎施	703	突騎施が砕葉奪取（冊府元亀 967 は 698-699 年に繫年）。突騎施の妥協下で唐砕葉鎮は名目上存続したとされる。
	705	1 月、武后退位。2 月、中宗即位、唐再興。
	706	突騎施の烏質勒が死に娑葛が継ぐ。唐は彼を嗢鹿州都督・懐徳郡王に任じて懐柔。イスラムのクタイバが商業都市パイカンドを陥す。
	708	唐は烏質勒の旧臣阿史那忠節の提言に従い、西突厥第二代興昔亡可汗阿史那元慶の子阿史那献を十姓可汗として擁立し、吐蕃とともに娑葛を攻撃。だが敗北。
	709	唐は突騎施の娑葛に大敗したため、娑葛を十四姓可汗として懐柔を図り、娑葛の旧西突厥への覇権も容認。唐・黠戛斯・突騎施は提携し、東突厥（突厥第二可汗国）の黙啜可汗に対抗。イスラムのクタイバがブハラ征服。
唐？	710～711	中宗は北庭都護・砕葉鎮守使・安撫十姓使呂休璟を金山道行軍副大総管とし、金山道行軍大総管の郭元振とともに進軍させ、黠戛斯・突騎施娑葛と合流したうえで、東突厥を攻撃しようとしたが、韋后らが中宗を毒殺したため、計画は頓挫[36]。唐では李隆基の謀反で睿宗が即位。東突厥は黠戛斯を攻撃し、娑葛を殺し突騎施を滅ぼす。娑葛支配下の砕葉は空白地と化す。唐は阿史那献を安撫招慰十姓大使・興昔滅可汗として旧西突厥支配（砕葉を含む）を委ねる。
	712	唐で玄宗即位。イスラムのクタイバがサマルカンド包囲、フェルガナ侵攻。サマルカンド王グーラク（烏勒伽）はクタイバと講和条約締結。
	714	唐側の阿史那献に対抗し、旧西突厥の都担が砕葉を奪うが、同年中に阿史那献が反乱を鎮圧。東突厥も砕葉進出を図るが失敗。
	715	イスラム内紛でクタイバがフェルガナで殺され、イスラム躍進が一時停止。
	716～717	蘇禄が突騎施を再興させる。唐は阿史那献を十姓可汗に、蘇禄を都督とし、蘇禄を懐柔しつつ阿史那献を上位とする。だが 6 ～ 7 月に阿史那献が蘇禄を攻めて逆に破れ、蘇禄の権威が確立。阿史那献がその後も砕葉を維持したかは説が分かれる。なお716年に東突厥（突厥第二可汗国）で黙綴可汗（カプガン）死去。初代イルテリシュ系と二代目カプガン系が対立し、前者の田比伽可汗（ビルゲ）即位。ビルゲ弟のキョル・テギンが軍事権を握り、トゥニュクク（阿史徳元珍）が輔佐役となり、唐との交易関係を重視。717 年に吐蕃・突騎施・大食が連合して安西四鎮（とくに亀茲周辺）を攻撃（おそらく突厥とも交渉[37]）。
	719	唐は突騎施の蘇禄を忠順可汗に冊立して懐柔。「十姓可汗」（阿史那献説と蘇禄説あり）は砕葉に継続居住希望。唐は安西節度使湯嘉恵の上表で、亀茲・疏勒・于闐・焉耆を安西四鎮とし、名実ともに砕葉を放棄。イスラム攻勢に伴い、サマルカンド王グーラクは唐へ援軍要請。

葉水城から羯霜那国（けつそうな）［カサンナ、キッシュ］にいたるまで、土地は窣利［ソグディアナ］と名づけ、人もそう称する。文字のなりたちは簡略で、もともと20余字あるが、それが組み合わさって［語彙が］でき、その方法がしだいに広がっている。……力田（のうみん）と逐利（しょうにん）が半ばしている（京都帝大校訂本『大唐西域記』巻1[38]）。

②（跋禄迦国［現在の温宿（アクス）］以来、野宿を重ねたあと）海（イシク・クル）に沿って西北に500里あまりで、素葉城（ヤブグ）に到着した。突厥の葉護可汗（統葉護可汗説と

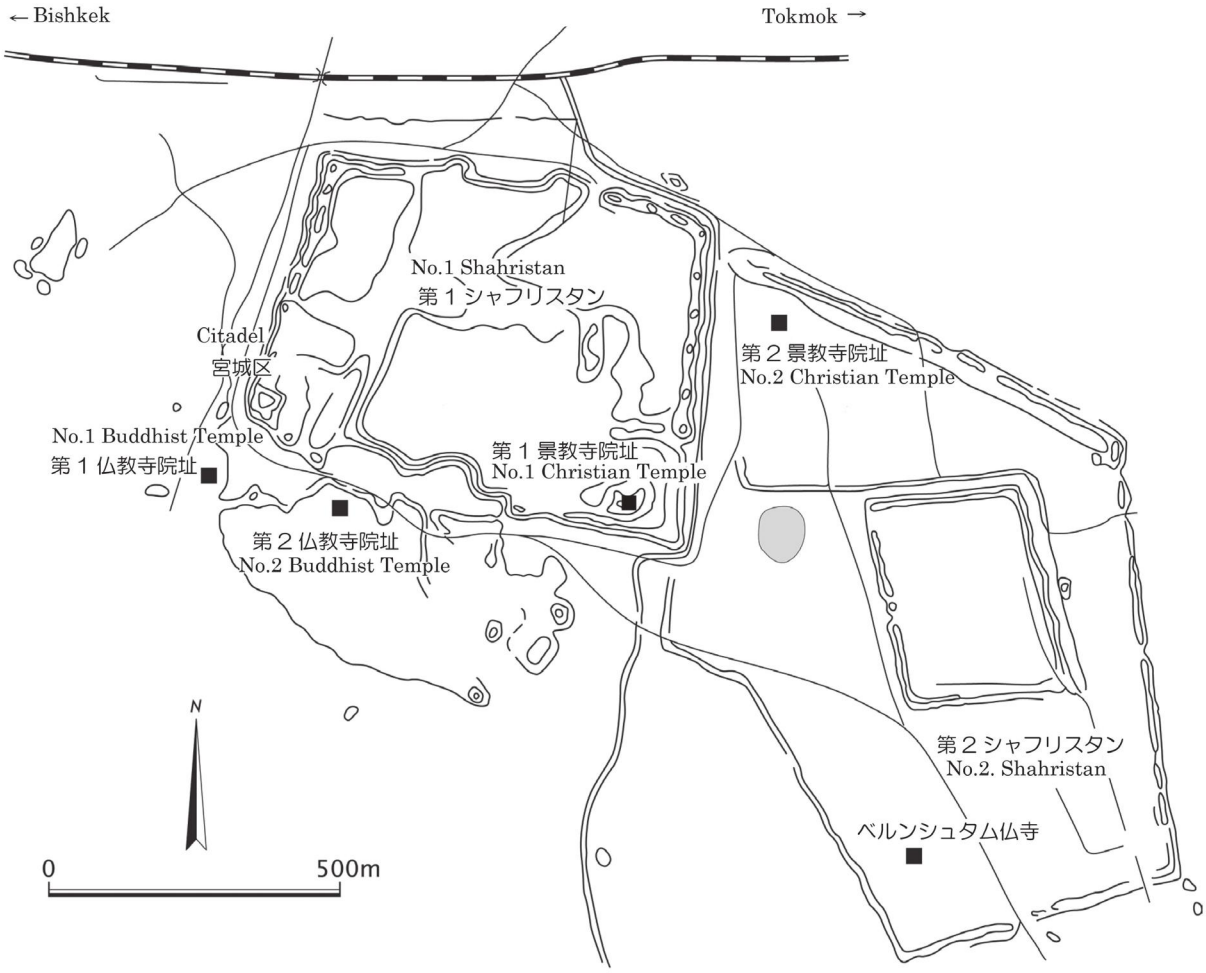

図３．アク・ベシム遺跡

肆葉護可汗説あり。年表参照）に会った。ちょうど狩りに出かけようとしており、軍馬はたいへん強壮であった。……（中略。可汗と部下の様子）……。面会すると、可汗はよろこんで「しばらく出かけますが、２、３日で帰るでしょう。法師さまはとりあえず衙帳（がちょう）［本拠地］でお待ちください」といい、達官（タルカン）の答摩支（タマチ）に命じて玄奘を衙帳に送って休ませた。……（中略。可汗と面会後、出立）……。ここ［衙帳］から西方に400里あまりで屛聿（びょういつ）に到着した。ここは千泉（メルケ付近）ともいう。その土地は数百里四方で、池や沼が多いのみならず、珍しい木が豊かに茂っている。森林が鬱蒼としていて、清涼湿潤であるので、可汗の避暑地であった。屛聿（びょういつ）から西へ150里ゆくとタラス城（現在のジャンブル）に至り、また西南200里で白水城（サイラム）に至った（『大慈恩寺三藏法師伝』巻２[39]）。

史料①は、かの玄奘が貞観３年（629）８月に長安を出発し、同19年（645）正月に長安に帰朝するまでの「志記」（記録）に基づく地誌である。引用部分とほぼ同じ記載が釈道宣（596～667年）『釋迦方志遺跡篇』（『大正新脩大蔵経』第51冊所収）にみえる。『釋迦方志遺跡篇』の記載は『大唐西域記』に基づく。史料②は、玄奘が大慈恩寺で仏典翻訳に従事したさい、弟子慧立（えりゅう）が玄奘の伝記『慈恩三藏行伝』（全５巻）を書き、そこに弟子彦悰が帰路記録を付加したもので、引用部分は慧立の手になる部分とみられる。

以上はみな砕葉に関する貴重な史料で、唐代砕葉の位置・周辺環境・統治者・習俗等々に触れており、多くの先行研究がある。ただし、史料①②に描かれる砕葉は、厳密には唐の直接統治期間に該当しない。当時すでに唐王朝は成立していたものの、まだその手は砕葉付近に伸びていないのである。すると史料①②は、唐朝進出以前の砕葉の様子を窺わせる格好の史料ということになる。

これによると、まず630年代の砕葉は突厥に属し

ていた（前掲年表も参照）。そもそも砕葉等の商人はシルクロード交易に従事し、そのキャラバン隊はたえず強盗・略奪等の危険にさらされており、突厥は格好の庇護者となりうる。一方、突厥は、ユーラシアの商業利権を糧としていた。それゆえ砕葉と突厥は、確たる上下関係を有しながらも、同時に互恵的な関係をも築き得た。[40]

このように、630年代の砕葉は、突厥と密接な関係にあった。ただし、「葉護可汗」の根拠地自体は、厳密には砕葉城と異なる場所にあったようである。内藤みどり氏はそれを、砕葉城の北（チュー河よりもさらに北）の羯丹山（けつたんさん）付近に比定し、避暑地の千泉とともに、西突厥の二大重要拠点と解している。[41]

また上記史料より、砕葉城がすでに城壁を有し、城内に「諸国の商胡」が雑居していたこともわかる。ここで注目すべきは、玄奘のみた城壁の規模（６、７里、つまり約2.5～3㎞）が、第１シャフリスタンとみごとに合致することである。ちなみに第２シャフリスタンの外周は3㎞以上である。また第１シャフリスタンと第２シャフリスタンを囲む巨大な外壁も見つかっているが、[42]その建造年代は不明で、[43]玄奘が描く城壁の規模とも合致しない。この点からも、「第１シャフリスタン＝630年代の砕葉城＝玄奘の訪問した砕葉城」の可能性が裏づけられる。

つぎに住民の生活様式をみてみよう。史料①によれば、彼らは糜［キビ］・麦［ムギ］・蒲萄［ブドウ］を栽培していたという。『通典』辺防９石国条本注所引の杜環『経行記』砕葉国条にも、類似の記載がみえる。本文全体は次節で引用・検討することとし（史料⑦）、ここではその一部を引用しておく。

③これより西海（カスピ海）までは、３月から９月には雲もなく雨も降らず、みな雪水で農業をしている。大麥［オオムギ］・小麥［コムギ］・稻禾［イネ］・豌豆［エンドウ］・畢豆［エンドウの一種？］がよく採れる。蒲萄酒［ブドウ酒］・糜酒［キビ酒］・醋乳［ヨーグルト？］を飲む。[44]

問題となるのは、本文冒頭の「これ」（此）がどこをさすかで、一見、引用文の直前にみえる「タラス城（怛羅斯）」をさすとも解釈できそうである。だが私見では、本引用文は「砕葉國」に関する説明文の総括部分にあたり、「此」は「砕葉國」をさすとみるべきであろう。実際に、本引用文（史料③）所引の特産物は、史料①所引の特産物（糜・麦・蒲萄）とも合致する（史料③によれば、さらにイネ・エンドウ・ヨーグルトの類も採れたことがわかる）。

史料①によれば、城内には「諸国の商胡」も住み、地元のソグド人と「雑居」していた。[45]ただし史料③によれば、砕葉国以西はみなが似たような品物を生産しているので、その版図内での特産物売買だけでは、大規模な利潤が得にくかったであろう。当時のソグド人商人は、砕葉国以東の稀少品（絹織物）を、砕葉国以西の品々と交換することによって、はじめて巨利を得られていたのではあるまいか。現に、第１シャフリスタンでは開通元宝（もしくは開元通宝）が出土し、[46]漢人商人も訪問していた可能性がある。当該銭は唐代武徳４年（621年）に鋳造されはじめ、数百年間流布しつづけた。

史料①によれば、こうしたチュー河沿岸の土地（素葉水城から羯霜那（けつそうな）国にいたるまで）と人びとは「窣利（そつり）」（ソグディアナ）と総称され、各々君長を擁立していた。第１シャフリスタンも、少なくとも突厥の傘下に入るまでは、独立を維持していたはずである。内藤みどり氏は、突騎施可汗銭やムグ山文書を活用し、710年に突騎施娑葛（しゃかつ）支配下のNavakat（Navikat。おそらく新城、すなわちKrasnaya Rechka）に「首長」（γωß/γωßω）がいた点を指摘し、同時期のソグド人植民市のアク・ベシムにも「首長」がいたはずであると推測している。[47]けだし卓見というべきであろう。

もっとも、唐進出以前の砕葉の様子をしめす漢文史料はほとんどないが、開元年間（713～741年）にマニ教徒が作った『老子西昇化胡経』序説に、80余国の「諸胡王」が列記され、「碎葉國王」が含まれている。[48]実在しない国王も含むが、完全な架空とも思われない。ただし実在しない国王を含む以上、それは開元年間の記録ではなく、むしろ過去に仮託したものとすべきで、砕葉が独立国であったときの記憶が反映されているのではないか。また、より確実な証拠として、『宋高僧伝』巻第18（『大正新脩大蔵経』巻50「史伝部２」所収）には、

④釈僧伽は、葱嶺の北の何国の人である。本人によれば、俗姓は何氏であるという。［これは］また、僧会がもともと康居国の人で、命［天命？］によって康僧会となったのと同様である。だから［彼は］胡と梵の姓名を併せもっている。名は梵音でありながら、姓は華語と関係しているのである。その何国を詳細にみると、砕葉国の東北にあり、砕葉の附庸にすぎない。釈僧伽は

本土［中国？］にいて若くして出家した。僧となったのち、志を立てて方［地方］を外遊した。はじめは西涼府にゆき、つぎに江淮地域をめぐった。おりしも龍朔初年［661年］のことであった。[49]

とあり、661年以前に砕葉国があり、複数の「附庸」国を擁したことを物語る。これは、砕葉国が唐や西突厥に挟まれながらも半独立を保ち、そのうえ砕葉城（第１シャフリスタン）を中心に、周辺聚落へ間接的支配力を及ぼしていたことをしめす。つまり、少ないながら漢文史料からも、砕葉国が半独立を維持し続けていたことが窺えるのである。

Ⅲ．唐代砕葉鎮の築城と破却

１．王方翼の築城と第２シャフリスタン

ところがその後、678年にいよいよ唐帝国が砕葉への進出を図る。それ以前から唐帝国の影響力が及んでいたふしもあるが（前掲年表参照）、第１シャフリスタンを直接統治下に置いていたかは疑問で、考古学的確証もない。そして翌679年９月頃には、王方翼が砕葉城を新たに築く。『文苑英華』巻93所収の張説「夏州都督太原王公神道碑」は、張説がしるした王方翼の神道碑で、そこに築城前後の説明がある。

⑤裴行倹が波斯（末裔ナルセス）の擁立を名目とし、じつは遮匐（李遮匐）を捕らえようとしたおり、公（王方翼）の威厳ある様子をみて、上奏文を郵送して彼を推挙した。詔が下され、公（王方翼）は波斯軍副使兼安西都護・上柱国とされ、安西都護懐宝（杜懐宝）は庭州刺史とされた。大々的に砕葉に築城した。街郭は入り組んでおり、夷夏（夷狄と唐人）があまねく見回ったが、端まで行きつくことはできなかった。……ほどなくして詔があり、公（王方翼）は庭州刺史となり、波斯使として金山都護を領した。前任者の杜懐宝はあらためて安西を統べることになり、砕葉に鎮守した。[50]

類似の記載は『新唐書』巻111王方翼列伝にもみえる。前掲年表がしめすように、当時西アジアではイスラム勢力の躍進がめざましく、ササン朝ペルシアは滅ぼされた。一方、砕葉城付近では、西突厥の阿史那都支（十姓可汗）が李遮匐らとともに猛威を振るい、吐蕃までがその味方についていた。そこで唐は、長安に亡命中のササン朝末裔ナルセスを西方で復位させるとの名目で、砕葉方面へ唐軍を進めた。唐軍を率いるのは、「安撫大食使（アラブを鎮撫する使者の意）」の裴行倹であった。裴行倹の本当の狙いは、阿史那都支の反乱を鎮圧することであったが、阿史那都支は用心深い。だから裴行倹は、アラブ鎮撫とササン朝復興の名目で西進し、阿史那都支が裴行倹一行への警戒を解いたところで、阿史那都支を急襲した。かくて唐は、初めて砕葉城を直接支配するに至った。そして史料⑤によれば、679年９月頃に砕葉の地に王方翼が新たに城を築いた。

築城に際しては、「波斯に送る（送波斯）」建前で集まった西州の豪傑子弟や西州前庭府の衛士が動員された。[51] 王方翼は、阿史那都支の捕縛以後も「波斯軍副使」や「波斯使」の職位を保持し、「送波斯」軍の統率権を有していた。そして築城後の679年末～680年初頃に杜懐宝と交替し、[52] 砕葉城を離れたとおぼしい。[53]

では、王方翼が築いたのは、アク・ベシム遺跡のどの部分であろうか。前節では上記史料をふまえ、アク・ベシム遺跡に新旧２城があり、第１シャフリスタンは唐朝進出以前からの城だとしたが、そうすると王方翼は第２シャフリスタン側を築いたのではないか。

もっとも、王方翼の城をめぐっては従来諸説ある。たとえば、クローソン氏や張広達氏は第１シャフリスタンとし、[54] ガリャーチェヴァ・ペレグドヴァ両氏や、加藤九祚氏、山内和也氏は第２シャフリスタンとする。[55] また最近では、ケンジェアフメト氏が上記両説を批判し、以下の新説を提唱している。すなわち、第１シャフリスタンは５世紀に建築されはじめ、建築技法的に唐代と関係がなく、むしろソグド風である。よって、王方翼が第１シャフリスタンを築くはずはなく、まず前説は否定される。また考古学的にみて、安西四鎮期の第２シャフリスタンには城壁がなく、築城はカルルク期（柿沼注:756年～940年）以降に下る。また第２シャフリスタンは約3970mに及ぶ５角形の城で、短期間では建造できない。これは、王方翼がわずか５旬（50日間）で築城したとの史料（『新唐書』巻111王方翼列伝）と矛盾する。よって、王方翼が第２シャフリスタンを築いたとの説も成り立たない。そこで第２シャフリスタン内の仏寺遺跡（ベルンシュタムが発掘した仏寺。以下、ベルンシュタム仏寺）をみると、唐代の瓦当などが出土

している。よって、これこそ王方翼の城であろう、と。[56]

だがこの説にも疑問がある。第１に、これでは王方翼の官衙（数十ｍ四方）が当時しっかりした外壁をもたず、剥き出しの状態で外敵（西突厥等）に晒されていたことになり、危険きわまりない。第２に、これでは王方翼が第１シャフリスタン外部に官衙を構えていたことになり、より大きな第１シャフリスタンの城郭内の砕葉民を統治しにくい。第３に、2017年度の調査で、第２シャフリスタン内の建造物（ベルンシュタム仏寺以外）から厖大な瓦が出土し、文様・技術面の類似性から、唐代の瓦とみられる。[57]とりわけ注目すべきは、筆者も関わった、漢文瓦書の発見である。[58]なぜなら瓦書は不動産（つまり建物）の一部を構成するので、これによって第２シャフリスタンは唐代遺跡で、漢字を行政言語とする行政府が設置されていたと確言できるからである。これは、第２シャフリスタン（ベルンシュタム仏寺以外）から唐代遺物は出土していないとするケンジェアフメト説の論拠を崩すものである。第４に、たとえば亀茲唐王城遺跡の日干煉瓦はほぼ縦35㎝、横20㎝、厚さ10㎝である。[59]一方、王方翼は50日間で築城したとされる。漢代の例では、詳細は不明とはいえ、毎日各人が80個の日干煉瓦を造っていたようである。[60]すると、縦3970m、幅5m、高さ5mの城壁を築く場合、日干煉瓦の製作に約3540人が必要で、それを積み上げる人員を加算しても6000人以下で十分であろう。また版築の場合、北魏の宣武帝が景明２年（501年）に東西15里・南北20里の洛陽外城（坊を含む）を55000人で、40日間で築いた例がある。すると第２シャフリスタン城壁（約3970m）は唐代の約９里にあたり、王方翼は50日で築城したとされるので、必要人員は約5657人となり、やはり6000人以下ですむ。[61]当時王方翼は大食（アラブ）鎮撫を名目とし、実際に西突厥首領（阿史那都支）を捕縛しており、彼の率いる軍勢が6000人を割込むとは考えにくい。現に694年には、砕葉鎮守使の韓思忠が「萬餘人」の反乱軍を破っているので、[62]砕葉鎮には万単位の唐兵がいたと思われる。これより、王方翼が50日間で第２シャフリスタン城壁を築くことはけっして不可能ではないと推測できよう。あくまでも机上の計算にすぎないとはいえ、少なくともこれより、王方翼がベルンシュタム仏寺だけを建造したとする説には無理がある。

以上より、筆者はガリャーチェヴァ・ペレグドヴァ両氏以来の第２シャフリスタン＝王方翼築城説を支持する。もっとも、『旧唐書』巻185上・良吏列伝上・王方翼列伝や、[63]『冊府元亀』巻410将帥部や、[64]『新唐書』巻111王方翼列伝等の記載を総合すると、[65]王方翼の城は本来四角形で、４面に３門ずつ、計12門があったごとくである。一方、地図をみると、第１シャフリスタンがほぼ正方形に近いのに対し、第２シャフリスタンの形状は四角でない。しかも現時点では、第２シャフリスタン城壁にはそれほど多くの門の遺構も確認できない。[66]第１シャフリスタンと第２シャフリスタンはぴたりと接続しているので、12門は第１シャフリスタンと第２シャフリスタンの門の総計である可能性も棄てきれないが、上述の人数計算によれば、王方翼が第１シャフリスタンにまで改築の手を伸ばす余力があったとは到底考えにくい。第２シャフリスタン＝王方翼築城説を支持する以上、この矛盾を解かねばならない。

そこで指摘したいのは、「四面十二門」がもともと誇張表現である可能性である。第一に、「四面十二門」を有する巨城は例外的で、じつは文献では洛陽城や長安城くらいしかない。よって、最果ての鎮城レベルが12門をもつとは考えにくい。第二に、現実的に城の内外を結ぶ道が12本もある必要があったとは思えない。それはまた、砕葉鎮城の防衛力にマイナスになりこそすれ、プラスになることはなく、防衛上も不可思議である。第三に、史料⑥には「（王方翼の城は）夷夏（夷狄と唐人）があまねく見回ったが、端まで行きつくことはできなかった」とあるが、第１シャフリスタンにせよ、第２シャフリスタンにせよ、実際にはそれほど大きくなく、これは誇張表現といわざるをえない。すると、王方翼がほかに誇張表現を採っても不思議はない。第四に、砕葉鎮城の門に関して『新唐書』巻43地理志下焉耆都督府本注には、

⑥調露元年に、都護の王方翼が築城した。４面に12門があり、曲がっていて軍勢の出し入れを隠せる形状であったという。[67]

とあり、末尾にわざわざ伝聞の意の「……という（云）」字が付されている。「云」字は、『旧唐書』『冊府元亀』『唐会要』『玉海』の該当箇所になく、『新唐書』はそれらの後に成立した書籍で、信憑性が劣る。だが筆者はむしろ、『新唐書』撰者があえて「云」字を書き足した点に注目したい。これは、『新

唐書』撰者が「四面十二門」を非現実と感じたために、意図的に伝聞表現を付した結果ではないか。第五に、そもそも12門は、伝統的な中国城市制においては、天子の住まう王城の構えである（『周礼』冬官・考工記）。安西四鎮の１つがこの城制を採るであろうか。碎葉鎮城が夷夏（夷狄と唐人）の慕う王城のごとき存在であるとの誇張表現から、碎葉鎮城が12門を有するとの伝聞が生じたのではないか。

もちろん、今後の発掘で12門が発掘されれば、以上５点の私見は棄却される。しかしそれでもなお、筆者がもっとも強調したい第２シャフリスタン＝王方翼築城説自体は崩れない。むしろ、かりに12門がみつかれば、第２シャフリスタン＝王方翼築城説にとって好都合である。それにもかかわらず第２シャフリスタンに12門がない可能性を指摘したのは、第２シャフリスタンに12門がなくとも第２シャフリスタン＝王方翼築城説に矛盾が生じない点を指摘しておくためである。

２．王正見による城壁破壊

では、唐代碎葉鎮城はその後、どのような最後を迎えたのか。年表によれば、碎葉鎮は西暦703年頃に突騎施に奪われて以来、名目上は存続していたけれども、実際にはほとんど唐王朝の直接統治下に置かれていなかった。そして719年には、とうとう安西四鎮からも外され、完全に唐王朝の手を離れることになる。その後の碎葉鎮跡地の様子をしめすものとして、『通典』辺防９石国条本注所引の杜環『経行記』碎葉国条がある。[68]

⑦碎葉国は……また碎葉城がある。天宝７年（748年）に、北庭節度使の王正見が征伐し、城壁は砕き壊され、邑居は荒廃した。むかし交河公主（阿史那懐道の娘。722年12月に玄宗が封じ、突騎施の蘇禄可汗に嫁ぐ）が「居止」されたところで、大雲寺が建てられており、まだ残存していた。碎葉川の西は石国と接し、だいたい距離は1000余里である。碎葉川沿いには異姓の部落があり、異姓の突厥がおり、それぞれ兵馬数万を擁していた。城堡同士は密集し、日々干戈を交えている。およそ農業を営む者はみな甲冑を身にまとい、好き勝手に略奪しあって奴婢としていた。碎葉川の西の端には城があって怛邏斯とよばれ、石国人の鎮があった。これこそ天宝10年（751年）に高仙芝の軍が敗れた場所である。これより西海（カスピ海）までは、３月から９月には雲もなく雨も降らず、みな雪水で農業をしている。オオムギ・コムギ・稲禾・豌豆［エンドウ］・畢豆［エンドウの一種？］がよく採れる。ブドウ酒・糜酒［オオジカの乳の酒？］・醋乳［ヨーグルト？］を飲む……。

本史料は、タラス戦でイスラム側に拉致された杜環が、のちに唐に帰国してから書き残した記録である。これによると、碎葉鎮跡地は諸国係争の地となり、748年には北庭節度使の王正見が来寇し、残されていた城壁を破壊している。このとき当地にはまだ第１シャフリスタンと第２シャフリスタンが並存していたはずであるが、王正見がどの部分を破壊したかは史料に明記されていない。

そこで賈耽（730～805年）の『皇華四達記』（『新唐書』地理志七下所引）をみると、

⑧谷を出ると、碎葉川の河口に至る。80里にしてバラサグン城［ブラナ遺跡か］に到達する。また西へ20里ゆくと碎葉城に到達する。碎葉城の北には碎葉水があり、碎葉水から北へ40里ゆくと羯丹山がある。十姓可汗はいつもここで君長を擁立している。碎葉から西へ40里ゆくと米国城に到達する。また30里ゆくと新城［クラスナヤ・レーチカ遺跡。後述］に到達する。[69]

とある。『皇華四達記』は、801年に皇帝へ献上された『古今郡国県道四夷述』の一部とされている。[70]すると、８世紀後半にもまだ、碎葉城（少なくともその一部）は残っていたことになる。実際に、第１シャフリスタン内の宮城区（ツィタデル）等は９～10世紀のものであり、宮城区が宮城区たりうるのは、その外壁がまだ残っているからに外ならない。さもなくば、宮城区が単独で平原地帯に屹立していたことになり、外敵が多いなか、危険きわまりない。よって、９～10世紀に宮城区が建造されたときには、第１シャフリスタンの城壁はまだ残っていたと考えられよう。すると、王正見が破壊したのは第２シャフリスタン側ではなかろうか。

この推測を裏づけるものとして、再度史料⑦をみてみよう。それによると、王正見が破壊した場所には、かつて交河公主が「居止」され、そこに大雲寺（大雲経寺）があったという。精確には、交河公主は阿史那懐道の娘で、722年12月に突騎施の蘇禄可汗に嫁ぎ、碎葉鎮城内に「居止」されたのはそれ以降である。蘇禄の死後、蘇禄の子が吐火仙可汗として都

摩度（もしくは都摩支）に砕葉で擁立された時期かもしれない。もしくは、彼女はその後、莫賀達干に逐われ、739年９月に長安に護送されており、長安に護送される直前に砕葉城にいたのかもしれない。「居止」という表現には、たんに居住しているというよりも、半強制的に留置されたという意味合いが強く、長安へ護送される直前の状況と合致するごとくである。一方、大雲寺は則天武后が690年10月に作ったものである。よって記述の順番は本来逆となるべきで、690年10月以後に大雲寺が作られ、のちにそこに交河公主が「居止」されたはずである。[71] その場所（大雲寺跡地）には従来諸説あったが、現在は考古学的に、第２シャフリスタン内の１区画に比定されている。[72] これは、王正見が破壊したのが第２シャフリスタン側だとする私見を裏づけるものである。

ともあれ以上本稿では、文献史料と考古調査の双方の成果を活かしながら、唐代砕葉鎮の前史、築城過程、そして放棄までの歴史を辿ってみた。そこで最後に、アク・ベシム遺跡付近出土の文字資料に注目し、出土文字資料研究の観点から、これまでのべてきたことを裏づけてみたい。出土文字資料は現時点で、石碑３点・瓦書１点・魚符１点・亀符１点に及ぶが、本稿ではとくに、筆者が実見できた石碑２点に絞って検討を加えたい。

Ⅳ．碑文よりみた唐代砕葉鎮

１．杜懐宝碑

杜懐宝は、既述のとおり、王方翼の後継者として砕葉鎮を「鎮守」した人物である。1982年、現地農民によって、ブラナの塔付近の博物館に杜懐宝碑が持ち込まれ、鑑定の結果、杜懐宝の碑文であるとの結論が下された。[73] なるほど、碑文には「杜懐」の２字がみえ、人名と目される。その内容を鑑みるに、造像記である。結果、本碑の出土したアク・ベシム遺跡は唐代砕葉鎮に比定されるに至った。[74] 王方翼の異動と杜懐宝の着任が680年頃であること、唐帝国の砕葉支配期間がおおよそ678～686年と692～703年であることを鑑みれば（年表参照）、杜懐宝碑の作成年代は680年頃～686年である可能性が高い。

2016年11月、筆者はスラヴ大学で詳細に碑文を実見する機会を得た。それによって全体的にいくつかの文字の解釈を確定し、いくつかの文字解釈の通説を改めることができた。もっとも、釈文のうち、とくに「天皇」の箇所は齊藤茂雄氏の釈文（拓本に基づく釈文）による。[75] 通説では「天子」と読まれてきたが、筆者の実見によると、たしかに「子」には読めない。おそらく齊藤説が妥当である。かりに齊藤説に従うと、杜懐宝碑の作成が680年頃～686年である可能性はさらに高まる。しかも前後の文字をよくみると、「天皇[?]□[?]后」と続くようでもあり、[76]「天皇天后」の可能性もある。現に、この表現は造像記に散見し、天皇は高宗、天后は武后をさす。これは674年からの名称で、[77]683年には高宗が崩御している。けれども、そうした作例は675年からみられ、高宗死後の作例や武周革命（690年）以後の作例もある。これは工人が手近にある造像記を安易に参照・踏襲したためである。[78] よって、杜懐宝碑の場合も、「天皇天后」をすぐさま年代特定の手がかりとみることには慎重さが求められる。ともかく筆者の釈文は以下の通り。

……安西副都
……碎葉鎮壓
十姓使上柱國
杜懐□□上為
天皇天后□下
□□□□□妣
見□□□使之
法界□□生普
願平安獲其
暝福敬造一仏
一[?]菩薩

ちなみに、釈文末尾の「一[?]菩薩」の箇所は、通説では「二菩薩」に作る。当時の常識に即せば、「二菩薩」で、三尊像を構成するはずである。だが筆者にはどうやっても「一[?]菩薩」にしかみえなかった。杜壊宝碑上部は折れており、何体の仏像があったかもわからない。「一仏一菩薩」を奉ずる説一切有部の影響であろうか。それとも筆者の間違いであろうか。今後の検討課題である。

２．クラスナヤ・レーチカ出土造像記

クラスナヤ・レーチカ遺跡（Krasnaya Rechka）は、ビシュケクとトクマクのあいだに位置する。[79] それは、アク・ベシム遺跡付近に点在する、アク・ベシム遺跡とほぼ同時代の遺跡のひとつとみなされている。全体は都市遺跡・墓地・仏教寺院遺跡などよ

図４．クラスナヤ・レーチカ遺跡

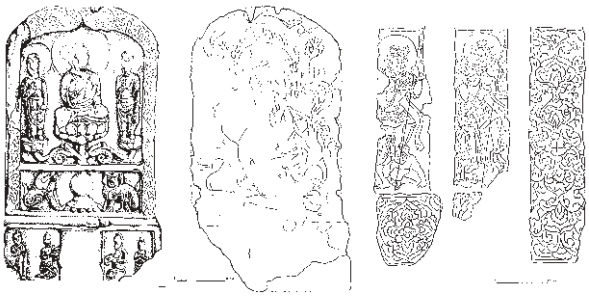

図５. クラスナヤ・レーチカ造像記

りなり、６世紀頃にソグド人入植者が城砦と商品取引所を作り、７～８世紀に市街地区が形成されたといわれている。[80]

そもそも漢文の伝世文献には、イシク・クル以西の都市として、まず砕葉の名前がみえ、西に十里ゆくと「米國城」が、また三十里ゆくと「新城」が、また六十里ゆくと「頓建城」が、また五十里ゆくと「阿史不來城」が、また七十里ゆくと「俱蘭城」が、また十里ゆくと「税建城」が、また五十里ゆくと「怛羅斯城」があるとある（史料⑧）。クラスナヤ・レーチカは一般に、そのなかの「新城」に比定されている。

またクラスナヤ・レーチカ遺跡は、ムグ文書やイスラム地理書にみえる Navakat や Navikat に比定されており、砕葉城（アク・ベシム。蘇禄夫人が滞在）と並び、突騎施首領の蘇禄の副牙的場所であった。[81] 蘇禄は、709年頃に台頭し、738年頃まで勢威を振るった突騎施の首領で、アラブ方面に版図拡大を図ったことから、アラブ史料によれば、アラブ側からは Abu Muzahim（襲いかかる人）の異名で恐れられていた。

クラスナヤ・レーチカ遺跡のなかでも、東南部にはいわゆる第二仏教寺院跡があり、ソグド文字やブラーフミー文字の史料のほか、漢文とおもわれる碑文の刻まれた三尊像も出土している。[82] ここではそのなかでも、第二仏教寺院跡出土の三尊像の背面下部の漢文に注目したい。従来その判読に成功した者は皆無のようである。だが、2016年11月に筆者がスラヴ大学で実見したところ、つぎのように読めた。これは管見の限り、中国史上最西端の出土漢文資料（銭などの簡単に移動できるものを除く）である。

清□□□□拳
為□□□□敬
造□□□□□
并□□□□□
□年五月造□　※敬は正確には「苟＋犬」。

本碑文は表面が大きく欠損し、固いもので意図的に削り取られたかのごとくである。そのため、文字はきわめて判読しにくいのであるが、上記釈文部分はたしかに判読できた。そのうち、とくに文章構造を理解するうえで重要な用語に注目し、それを他の石刻資料と照合すると、本文はほぼ次のような構造になっていたと考えられる。

清……の……拳……の為に、敬みて……并びに……を造る。……年五月造る。

なかでも杜懐宝碑と「為……敬造」部分が一致する点は重要である。これより、本碑は杜懐宝碑同様に造像記の１種と解される。

本碑文冒頭の「清」字は、当時の仏教経典の書式に照らせば、「清信」の「清」ではないか。たとえば675年に写経された敦煌文書（スタイン本1515号）『観無量寿経』跋文には、

大唐上元２年（675年）４月28日、仏弟子で清信女の張氏（原文は「佛弟子清信女張氏」）は、思い立ち、つつしんで『無量寿観経』１部と『観音経』１部を写経しました。願わくば、この功徳によって、上は天皇・天后の聖化が無窮となることに資し、下は［功徳が］７代父母にまで及びますように。あわせて［功徳が］法界の民草に及びますように。また［彼らが］煩悩の門を超越しますように。［彼らが］ともに浄妙国土に登りますように。[83]

とある。「佛弟子清信女張氏」の「清信」は、在家の仏教徒に冠せられる形容詞である。それは男女問わず冠せられ、ほかにも敦煌文書（スタイン本217号）『観音経』跋文所見「清信佛弟子陰嗣」や敦煌文書（スタイン本114号）『妙法蓮華経』巻第７写本所見等の事例があり、唐代にはめずらしくない。前掲『観無

量寿経』跋文に「敬造」の語があるのも、クラスナヤ・レーチカ碑と共通する。

ただし前掲史料はいずれも仏教経典であり、厳密にいえば造像記ではない。むしろ杜懐宝碑を例にとれば、碑文冒頭には主語の官名がくる可能性も絶無ではない。かりに「安西都護」のごとく地名を冠するとすれば、唐代以前の西域関連史料で「清」字を冠する地名の「清池」が有力である。前掲史料①の「清池（イシク・クル）の西北に500里あまりで素葉水（Chui river）の都市に到着する」が例である。このほかに、『新唐書』や「混一疆理歴代国都之図」所見の「清鎮軍」や「清海軍」も候補であるが、クラスナヤ・レーチカからは遠すぎる。筆者は、現時点では「清信」の「清」である可能性がもっとも高いと考えているが、いちおう後説の可能性も指摘しておく。

以上、２点の砕葉付近出土碑文を紹介･検討した。これによって唐代砕葉鎮（アクベシム遺跡）に漢人が居住していたこと、そこに漢字文化圏（とくに漢文行政文書に基づく支配圏）が及んでいたこと、漢字を媒介とした仏教が周辺に流布していたこと、クラスナヤ・レーチカ等にも漢字文化とそれを媒介とした仏教が及んでいたことを裏づけた。唐朝進出の影響は、けっしてアク・ベシム遺跡内に収まりきるものではなく、その周辺地域にも確実に影響を与えていたのである。

それでは、アク・ベシム遺跡を中心とする唐代遺跡群は、相互に一体どのような関係にあったのか。文字資料が不足しているため、具体的な関係性を探るのは至難であるが、于闐（コータン）の例が参考になるのではなかろうか。すなわち､タリム盆地（タクラマカン砂漠）に位置する于闐は､砕葉と同じく、当時重要なオアシス都市であり、諸国争乱の的であるとともに、しばしば安西四鎮の一つが置かれた。伝世文献と出土文字資料による研究によれば、もともと当地には、地元民による于闐王国があった。安西四鎮設置期には、そこに都督府が置かれ、于闐国王が都督を兼ねた。そのもとには複数の蕃州が設けられ、州刺史が統治した。州刺史も于闐王国の王族が任官した。州の下にはさらに郷・村があった（他地域では一般に州―県―郷―里）。都督府・州・郷・村と並置される形で、鎮守使の率いる鎮守軍も駐屯し、周辺聚落には鎮守軍麾下の鎮や守捉が配置された。民は郷・村に属し、都督府・州・鎮守軍は彼らに多様な物品・家畜・労働力を課した。[84)]

以上を参考にすると､安西四鎮設置期の砕葉にも、都督府（州―郷―里）と鎮（鎮守使）による二重統治体制が布かれていたのではないか。現に、伝世文献や出土文字資料には、砕葉関連の官名として「安西副都護」や「砕葉鎮守使」や「州」が登場する。すると、新城（クラスナヤ・レーチカ）は本来、砕葉の都督や鎮守使に属する下位の行政単位で、唐の砕葉鎮放棄後にその独立的地位を高めてゆくのではないか。このように、砕葉城（アク・ベシム遺跡）だけに注目するのではなく、その周辺遺跡も砕葉鎮の構成要素をなしていたと考え、それらの相互関係を念頭に置きながら遺跡発掘をすすめてゆくことこそ、今後私たちに求められていることではなかろうか。

おわりに

以上、伝世文献研究・考古発掘調査・出土文字資料研究の成果をふまえ、唐代砕葉鎮に関する若干の検討を行なった。具体的には、まず唐代砕葉鎮をふくむ安西四鎮に関する伝世文献と、それをふまえた近年の先行研究をふまえ、唐代砕葉鎮をめぐる歴史を概観した。つぎに唐朝進出以前の砕葉のありようを文献に基づいて説明した。さらに当該遺跡の考古調査の一端を紹介し、それと歴史学的知見との相互検証過程を通じて、アク・ベシム遺跡（とくにそのなかの第２シャフリスタン中心）こそ唐代砕葉鎮だとの説を検証した。そして最後に､出土文字資料（杜懐宝碑とクラスナヤ・レーチカ碑）の新釈文を提示し、唐代砕葉鎮遺跡の存在を裏付けるとともに、唐代砕葉鎮が周辺の聚落や寺院をも包括する複合体をなしていた可能性を指摘した。さらに、唐代砕葉が都督系統と鎮守使系統による二重統治体制下にあり、その下部機構がクラスナヤ・レーチカ等の周辺遺跡に置かれていた可能性にも言及した。本稿が今後の砕葉鎮発掘の一助になれば幸いである。

註

１）前嶋 1971:150 は「唐人が天山以西に営んだ最初にして最後の城郭」とする。前嶋はまた、タラス戦以後も唐側主将の高仙芝や封常清が失脚せずに活躍し続けていることから、タラス敗戦の戦略的意義の過大評価を戒めている。もとよりイスラム側に東進の意図は希薄で、唐側もすでに719年に砕葉鎮を放棄し、748年以前には第２シャフリスタンの放棄が確認でき（本文で後述）、西

進の意図は希薄であった。ただし、751年に高仙芝らが碎葉を越えて西進を図ったのも事実である。筆者が本文で「（タラス戦により）唐の西進は止ま」ったとするのは、その意味においてである。

2）尚 2016:39～56。

3）1893 年にサンクトペテルブルク大学がキルギス地方にバルトリドを派遣して以来、当地の実地調査が進み、バルトリドはアク・ベシム遺跡を発見した。1904年にはシャヴァンヌがトクマク付近に唐代碎葉鎮があったと推定。その後､ベルンシュタムらが発掘調査をすすめた。1961年、イギリスのクローソンがアク・ベシム＝碎葉鎮説を提唱した。1982年には水官（mirab）が第２シャフリスタン内の仏寺遺跡で偶然杜懐宝碑を発見。ブラナ博物館をへて、スラブ大学へ移管された。1996年に報告されて以降、数名の研究者が釈文を提示している。また1997年春には、現地民が遺跡城壁南側（ジャブリンが発掘した第二仏寺遺跡）で漢文残碑を発見し、ルボ＝レスニチェンコが試釈し、裴行儉が西突厥都支らの乱平定時に建てた紀功碑残片だとし、周偉洲もそれを支持した。2011-2013年には東京文化財研究所・奈良文化財研究所・キルギス民族科学院が考古調査を行い、アク・ベシム遺跡は10世紀末～11世紀初にすでに遺棄されていたとした。上記学説史に関しては、城倉他 2016:43-71や肯加哈買提 2017:71-83 参照。

4）山内他 2018:121-168。

5）石 2012、劉 2016。

6）内藤 1988:1～50、齊藤 2016:81～92。

7）前嶋 1971:129～200。

8）帝京大学文化財研究所編2017は、従来のシャフリスタンを第１シャフリスタン、ラバトを第２シャフリスタンとよぶ。ここでは便宜上、この説に従っておくが、今後遺跡理解が深まるにつれて名称変更がありうる点は注意しておく必要がある。

9）Rasppova1960.

10）張 1995 年。

11）山内他 2018:121-168。

12）第１シャフリスタン南方のいわゆる第２仏教寺院は、考古学的には６～７世紀の創建で、おそらく突騎施の来襲で、７世紀末～８世紀初頭に火で破壊されたとみられる。南西のいわゆる第１仏教寺院はソグド式日干煉瓦製で、東トルキスタンと中央アジア（西トルキスタン）を折衷した建築様式により、東トルキスタンに移住した、または住んだことのある中央アジア出身のソグド人の手になるものといわれる。第２仏教寺院の創建よりも遅く、８世紀には破壊に遭っている。加藤 1997:121-150。

13）山内 2017。

14）玄奘の碎葉訪問時期については現在、梁 1922:140～143 以来、森安 2016:187 等も支持する貞観２年（628年）説や、De la Vaissiere 2010:165-166、吉田 2011:8-78 の支持する貞観４年（630年）説がある。また玄奘の面会相手の「葉護可汗」に関しても従来の統葉護可汗説に対し、De la Vaissiere は肆葉護可汗とする。統葉護可汗は628年に殺され、内乱の後、630年に肆葉護可汗が即位しているため、必然的に、貞観２年論者は統葉護可汗説を、貞観４年説論者は肆葉護可汗説を採ることになる。

15）伊瀬 1955:197 ～ 199 や内藤 1988:21～29は碎葉鎮説を主張する。一方、松田 1970:357～391等は異論を唱える。

16）佐藤 1958:211、山口 1983:507～527。

17）内藤 1988:29。

18）内藤 1988:30～44。

19）内藤 1988:45。

20）佐藤 1958:248～326、周 1985:97～106。

21）内藤 1988:30～47頁。

22）内藤 1988:280

23）旗手 2014:38～63。

24）森安 2015:138～142。

25）森安 2015:138～146。

26）伊瀬 1955 年、244～245。

27）内藤 1988:280

28）旗手 2014:38～63。

29）伊瀬 1955:220-222は、杜懐宝が庭州刺史兼金山都護となったのを 677-679 年、王方翼が異動したのを682年とする。

30）周 2016:211～227。

31）内藤 1988:305～362。

32）森安 2015:132～229。

33）森安 2015 年 :153 頁、註12。

34）唐の王孝傑らと突騎施による四鎮奪還作戦が692年の年内に終わらず、693年にも続いた点は、森安 2015:152-153。

35）旗手 2014:38～63。

36）内藤 1988:305～362。

37）森安 2015:164～169。

38）清池西北行五百餘里、至素葉水城。城周六七里、諸國商胡雜居也。土宜糜・麦・蒲萄。林樹稀疎。氣序風寒、人衣氈褐。素葉已西數十孤城、城皆立長。雖不相亶命、然皆役屬突厥。自素葉水城、至羯霜那國、地名窣利、人亦謂焉。文字語言、即隨稱矣。字源簡略、本二十餘言、轉而相生、其流浸廣……力田・逐利者雜半矣。

39）……循海西北行五百餘里、至素葉城。逢素葉城。逢突厥葉護可汗。方事畋遊、戎馬甚盛。……。既與相見、可汗歡喜云、「暫一處行、二三日當歸。師且向衙所」。令達官答摩支引送安置。……自此西行四百餘里、至屏聿。此曰千泉。地方數百里、既多池沼、又豐奇木。森沈涼潤、既可汗避暑之處也。自屏聿西百五十里至呾邏斯城。又西南二百里至白水城。

40）荒川 2010:18-151、石見 2018:375～396。

41）内藤 1988:48。

42）Kyzlasov1959.

43）肯加哈買提 2017:90 は、建築技術よりみて、葛邏禄期［柿

沼注：７～12世紀］より遅いはずがないとする。

44）從此至西海以來［東字の誤］、自三月至九月天無雲雨、皆以雪水種田。宜大麥・小麥・稻禾・豌豆・畢豆。飲蒲萄酒・糜酒・醋乳。

45）榮 2014:125 ～ 127 によれば、ソグド聚落内では一般に内部通婚が行なわれ、ほかにイラン系胡人との通婚がみられる程度で、漢人との通婚例は基本的にない。

46）帝京大学文化財研究所編 2017。なお『古今図書集成』経済彙編食貨典錢鈔部「右碎葉鐵國錢。徐氏曰、賓鐵作之。形如兩鐶相連、枚各圍寸九分。聖曆中、御史封思業使西域、監斬叛突厥阿悉結薄露大足中。還雒陽、得西域諸國錢。此與何國以下六品並是也」によれば、碎葉国では独自に鉄銭を鋳造していたようであるが、現時点で考古学的裏づけは得られていない。

47）内藤 1988:19。

48）復以神力召諸胡王。無問遠近。人士咸集。于闐國王乃至朱俱半王・渴叛陀王・護密多王・大月氏王……疎勒國王・碎葉國王・龜茲國王・拂林國王・大食國王……高昌國王・焉耆國王・弓月國王・石國王・瑟匿國王・康國王・史國王・米國王……大秦國王……五天竺國王。如是等八十餘國王。

49）釋僧伽者。葱嶺北何國人也。自言俗姓何氏。亦猶僧會本康居國人便命爲康僧會也。然合有胡梵姓名。名既梵音。姓涉華語。詳其何國在碎葉國東北。是碎葉附庸耳。伽在本土少而出家。爲僧之後誓志遊方。始至西涼府。次歷江淮。當龍朔初年也。

50）裴行儉名立波斯、實取遮匐、偉公偉厲、飛書薦請、詔公爲波斯軍副使兼安西都護・上柱國、以安西都護懷寶爲庭州刺史。大城碎葉、街郭迴互、夷夏縱觀、莫究端倪。……無何、詔公爲庭州刺史、以波斯使領金山都護。前使杜懷宝更統安西、鎮守碎葉。

51）劉 2016:180-187。

52）内藤 1997:151-158。

53）劉 2016:187-198。

54）Clauson1961:1-13 や張広達 1979:78。

55）Goryaceva, V.D. & Peregudova, S. 1996:186-187、加藤 1997:121-150、山内 2017:61-72。

56）肯加哈買提 2017:174。

57）櫛原 2018。

58）漢文瓦書には「懷」字が確認でき、上にも文字の一部がみえる。本瓦書の発見には筆者も居合わせた。筆者はこれまで机上で議論をするのみで、出土文字資料の発見現場に居合わせたことはなかった。Bobomulloev Bobomullo 氏と土器を分別していたとき、彼がおもむろに文字ではないかと当該瓦書をみせてくれたときの感動は忘れられない。この場を借りて、山内和也氏をはじめとする関係者に深甚に謝する。

59）張 2003:29-21。

60）大庭 1990、敦煌漢簡（第１簡）。

61）『魏書』巻８世宗宣武帝紀伝「九月丁酉、發畿内夫五萬人築京師三百二十三坊」、『北史』巻４世宗宣武帝紀「九月丁酉、發畿内夫五萬五千人築京師三百二十坊、四旬罷」、『魏書』中華書局本校訂「南・北・殿三本和北史卷四「五萬」下有「五千」二字。又北史作「三百二十坊」。按卷一八廣陽王嘉傳也作「三百二十坊」。「坊」上「三」字當衍」によれば、宣武帝は景明２年に55000人を動員し320坊を築いた。森 1970:244-261 によれば、当時の洛陽では、東西６里、南北９里の内城（城）に加え、新たに東西15里、南北20里の外城（郭）が増築され、外城内に320坊（＝里。「防」字より転じ、土壁を有する区画をさす）が整然と並んだ。これは、長さ70里分（15里＋15里＋20里＋20里）の城壁（坊を含む）を40日間かけ、55000人で築いたことを意味する。第２シャフリスタンは全長 3970m で、森 1970:264～268によれば１里＝約 440 m ゆえ、3970m は約９里である。王方翼はこれを 50 日で築いたのであるから、必要人員は約5657人となる。

62）『資治通鑑』巻205延載元年条。

63）會吏部侍郎裴行儉西討遮匐、奏方翼爲副、兼檢校安西都護。又築碎葉鎮城、立四面十二門、皆屈曲作隱伏出沒之狀、五旬而畢。西域諸胡競來觀之。因獻方物。

64）「唐王方翼爲安西都護。高宗朝安撫大食使裴行儉之遮匐也、詔以方翼爲副行儉、軍還、方翼始築碎葉鎮城、立四面十二門、皆屈曲作隱伏出沒之狀、五旬而畢」。類似の記載は『唐会要』巻73や『玉海』巻174宮室唐碎葉城条にもみえる。

65）方翼築碎葉城、面三門、紆還多趣以詭出入、五旬畢。

66）Kyzlasov1959 や Kožemyako1959 の地図参照。

67）調露元年、都護王方翼築、四面十二門、爲屈曲隱出伏沒之狀云。

68）「碎葉國……又有碎葉城。天寶七年、北庭節度使王正見薄伐、城壁摧毀、邑居零落。昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存。其川西接石國、約長千餘里。川中有異姓部落、有異姓突厥、各有兵馬數萬。城堡閒雜、日尋干戈、凡是農人皆擐甲冑、專相虜掠以爲奴婢。其川西頭有城、名曰怛邏斯、石國人鎮、即天寶十年高仙芝軍敗之地。從此至西海以來［東字の誤］、自三月至九月天無雲雨、皆以雪水種田。宜大麥・小麥・稻禾・豌豆・畢豆。飲蒲萄酒・糜酒・醋乳」。杜環については前嶋 1971:85-102。

69）出谷、至碎葉川口、八十里至裴羅將軍城。又西二十里至碎葉城、城北有碎葉水、水北四十里有羯丹山、十姓可汗每立君長於此。自碎葉西四十里至米國城、又三十里至新城。

70）榎 1994:192-203。

71）従来本文の読み方には２説ある。交河公主が住んだ場所に大雲寺を建てたとするシャヴァンヌ説と、王正見が碎葉城を破壊したことと、碎葉城にかつて交河公主が住んでいたことと、碎葉に建てられた大雲寺が 748 年頃にまだ現存していたことを、それぞれ別々に理解する説である。Forte, A. は、大雲寺が748年に建てられたはずがな

ことから、前説を否定する。加藤 1997:158-159 参照。

72）従来は大雲寺＝アク・ベシム第１寺院跡説が有力で、ケンジェアフメト等は現在も本学説を支持する。第１寺院跡は1953～1954年にキズラソフ等が発掘し、７世紀末～８世紀初頭の遺跡とした。Clauson1961 はアク・ベシム＝砕葉城説を提唱した上で、大雲寺748年建説に則り、第１寺院跡＝大雲寺説を提唱した。一方、加藤 1997:158-159 は「アクベシム第１寺院が 692-705年に建てられた大雲寺である可能性は否定できない」としつつも、結局は「私には、第１寺院址が大雲寺であったとは考えられない。それが防壁の外側にあり、しかも建築技術において全体にあまりにも中央アジア的色合いが強すぎるからである。大雲寺は今も地下に眠っているかもしれない」とする。さらに加藤氏は「実質的に最も中国的要素の大きいのは、アクベシム都城址の防壁内の僧院址である。ただ年代がベルンシュタムによって９～10世紀に比定されていて、大雲寺の年代とはちがいすぎる」とも付記している。しかしベルンシュタムの比定自体は根拠が曖昧で、むしろ帝京大学文化財研究所編2017は大雲寺が第２シャフリスタン内にあったと想定している。

73）加藤 1997:121-150。

74）内藤 1997:151-158。

75）齊藤 2016 の英語版（2017年）参照。

76）山内和也氏の御助言による。

77）『旧唐書』巻６則天武后本紀長安４年条「詔依上元年故事、號爲天后」、『新唐書』巻４則天武后本紀「上元元年、高宗號天皇、皇后亦號天后、天下之人謂之「二聖」」、『通鑑』巻 202 上元元年条「皇帝稱天皇、皇后稱天后、以避先帝、先后之稱。改元、赦天下」によれば、上元元年（674年）に天后と称した。なお、天后を名乗ろうとした事例は則天武后以前にもあり、吐谷渾可汗に嫁した光化公主の例がある（『通鑑』巻178隋開皇16年条等）。

78）礪波 1986:397-477。

79）クラスナヤ・レーチカに関しては内藤 1997:151-158 等に詳しい。

80）加藤 1997:159-160。

81）内藤 1988:16。

82）加藤 1997:161-166 によれば、寺院部分は、それよりも古い建物の上に立てられていた。早期の遺物として７～８世紀の仏涅槃像等があり、アク・ベシム仏教建築物と同時期（８世紀後半の）に崩壊したらしい。また加藤 1997:166-178 によれば、寺院東側にも建築物があり、最下層は中国が進出した７世紀のもので、重厚な開元通宝３点が出土し、上層はカラハン朝のものである。ほかに林 2017 もある。

83）大唐上元二年四月廿八日、佛弟子清信女張氏、發心敬造无量壽觀經一部及觀音經一部。願以此功德、上資天皇・天后聖化无窮、下及七代父母。并及法界倉（蒼）生。並超煩惱之門。俱登淨妙國土。

84）森安 2015:191～202、吉田 2006:99～116、荒川 2010:308～311。

文献

日文（五十音順）

荒川正晴　2010 『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』 名古屋大学出版会

伊瀬仙太郎　1965『中国西域経営史研究』 巌南堂

石見清裕　2018「むすび」『ソグド人墓誌研究』 汲古書院 375～396 頁

内藤みどり　1988『西突厥史の研究』 早稲田大学出版部

内藤みどり　1997「アクベシム発見の杜懐宝碑について」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』 シルクロード学センター

榎一雄　1994「賈耽の地理書と道里記の称とに就いて」『榎一雄著作集』第７巻　汲古書院

大庭脩　1990『大英図書館蔵敦煌漢簡』 同朋舎出版

加藤九祚　1997『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』 シルクロード学センター

櫛原功一　2018「アク・ベシム遺跡出土の瓦」『山梨文化財研究所報』第 57 号

齊藤茂雄　2016「砕葉とアク・ベシム――７世紀から８世紀前半における天山西部の歴史的展開――」『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・プルン遺跡―― 2011～2014 年度――』 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター

佐藤長　1958『古代チベット史研究』上巻　同朋舎〔1977 再版〕

城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・山内和也・バキット アマンバエヴァ　2016「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査」『WASEDA RILAS JOURNAL』第４号

帝京大学文化財研究所編　2017『キルギス共和国国立科学アカデミーと帝京大学文化財研究所によるキルギス共和国アク・ベシム遺跡の共同調査 2016 年』 キルギス共和国国立科学アカデミー歴史遺産研究所・帝京大学文化財研究所

礪波守　1986「唐中期の仏教と国家」『唐代政治社会史研究』 同朋舎

旗手瞳　2014「吐蕃による吐谷渾支配とガル氏」『史学雑誌』第 123 巻第１号

林俊雄　2017「クラスナヤ・レチカ Krasnaya Rechka 遺跡の仏教遺跡」『2016 年度 中央アジア遺跡調査報告会』 帝京大学文化財研究所・帝京大学シルクロード総合学術研究センター

前嶋信次　1971『東西文化交流の諸相』 誠文堂新光社

松田壽男　1970『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』 早稲田大学出版部

森鹿三　1970『東洋学研究　歴史地理篇』 同朋舎

森安孝夫　2015「吐蕃の中央アジア進出」『東西ウイグルと

中央ユーラシア』　名古屋大学出版会
森安孝夫　2016『シルクロードと唐帝国』　講談社
山内和也　2017「チュー川流域における都市や集落の出現――遊牧民とソグド人――」『キルギス共和国国立科学アカデミーと帝京大学文化財研究所によるキルギス共和国アク・ベシム遺跡の共同調査 2016』　キルギス共和国国立科学アカデミー歴史遺産研究所・帝京大学文化財研究所
山内和也・櫛原功一・望月秀和　2018「2017 年度アク・ベシム遺跡発掘調査報告」『帝京大学文化財研究所研究報告集』第17集
山口瑞鳳　1983『吐蕃王国成立史研究』　岩波書店
吉田豊　2006『コータン出土８-９世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』神戸市外国語大学研究叢書 38
吉田豊　2011「ソグド人とソグドの歴史」『ソグド人の美術と言語』　臨川書店

中文（ピンイン・アルファベット順）
努爾蘭・肯加哈買提　2017『碎葉』　上海古籍出版社
榮新江　2014『中古中国与外来文明（修訂版）』　生活･読書･新治三聯書店
梁啓超　1922『中国歴史研究法』　商務印書館
尚永亮　2016「唐碎葉与安西四鎮百年研究述論」『浙江大学学報（人文社会科学版）』第46巻第１期
石墨林編著　2012『唐安西都護府史事編年』　新疆人民出版社
劉子凡　2016『瀚海天山:唐代伊、西、庭三州軍政体制研究』　中西書局
張広達　1995「碎葉城今地考」『西域史地論叢初編』　上海古籍出版社
張平　2003「庫車唐王城調査」『新疆文物』第１期
周偉洲　1985『吐谷渾史』　寧夏人民出版社
周偉洲　2016『新出中古有関胡族文物研究』　社会科学文献出版社

欧米文（アルファベット順）
Clauson, G. 1961. Ak Beshim-Suyab. Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. London
De la Vaissiere 2010. Note sur chronologie du yoyage de Xuanzang. Journal of Asiatique. no.298-1. pp.165–166
Kožemyako, P.N.1959 Rannesredhevekovye Goroda I poseleniya Cuyskoy doliny.
Kyzlasov, L.R.. 1959. Arheologiceskie Issledovaniya Na Gorodise Ak-Besim v 1953–1954 gg.. Trudy Kirgizskoy Arheologo-Etnograficeskoy Ekspedicii II. Moskva.
Rasppova, V.I..1960. Concarnye Izdeliya Sogdicev Cuyskoy Doliny: Po Materialam Raskopok na Ak-Besime v 1953–1954 gg. Trudy Kirgizskoy Arheologo-Etnograficeskoy Ekspedcii. IV. Moskva.

［付注］本稿は、研究報告「唐代碎葉史稿」凉州文化与絲綢之路国際学術研討会（2018年10月11日、於武威市武威建隆大酒店）に基づく。本稿校正段階で齊藤茂雄氏よりいくつかの御助言を賜わった。深甚に謝する。